

妊娠周期と薬の影響について

妊娠中に気になることの一つに赤ちゃんへの薬の影響(催奇形性)があります。
妊娠中は週数によって薬の影響が異なります。

🍀 妊娠3週末まで

この間までの薬の使用は赤ちゃんの奇形を引き起こしません。薬の赤ちゃんへのダメージが流産を引き起こす可能性はありますが、この時期のダメージは修復されます。ほとんどの場合、妊娠は生理が来なくて気付くため、妊娠に気付いたときはこの時期を過ぎていることが多いです。

🍀 妊娠4～7週末

この頃は主要な器官が作られる時期で赤ちゃんは薬の影響を受けやすいため、催奇形性が理論的に問題になります。しかし、催奇形性を起こす薬は限られています。
(代表例:ワルファリン、ビタミンA、一部の抗てんかん薬など)

🍀 妊娠8～12週末

主要な器官の形成は終わりますが、上あごや性器などの形成がまだ続いています。
大きな奇形は起こしませんが、小さな奇形を起こしうる薬があります。

🍀 妊娠13週以降

それぞれの器官が成長する時期に入ります。そのためこの時期に薬による奇形は起こりません。しかし赤ちゃんの成長を阻害したり、内臓の機能を障害したりすることがあるため、引き続き注意は必要です。

妊娠と薬の使用時期

区分	極初期				初期												中期		後期～末期	
月数	1ヶ月				2ヶ月				3ヶ月				4ヶ月				5～7ヶ月		8～10ヶ月	
週数※2	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16～27		28～39	
胎児の発育	胎児の発育				器官の形成								体の成長、機能的発達							
備考	基本的に薬の影響は受けない。				赤ちゃんの外形や臓器が作られる時期。 特に2ヶ月目が重要。								奇形の心配はほぼなくなる。ただし、薬によっては赤ちゃんの成長に悪い影響を与えることがある。特に後期から末期には注意。							



妊娠中に処方されることがあるお薬

以下にご紹介するお薬は、当院で採用されている薬であり、お母さんの症状に応じて医師の指示で処方されるものです。

お腹の張り止め

★リトリン錠・ウテメリン錠



効能・効果

子宮の異常な収縮を抑え、下腹部の張った感じや痛みなどを改善します。
通常、切迫流産や早産を予防するために使います。

副作用

よく出る副作用として動悸や手指振戦、嘔気、倦怠感、ほてりなどが報告されています。
慣れれば症状が軽減することが多いです。

副作用の動悸がひどい場合、症状を和らげるため漢方薬が処方されることがあります。
大切なお薬なので自己判断で中止せず、主治医に相談してください。

また起きることは稀ですが、のどの渇きや多飲、力が入らない、尿が濃い赤茶色になる、あざがでやすいなどの症状があれば、主治医に相談してください。

★ズファジラン錠



効能・効果

子宮の異常な収縮を抑え、下腹部の張った感じや痛みなどを改善します。
通常、妊娠17週未満の切迫流産や早産を予防するために使用します。
大切なお薬なので自己判断で中止せず、主治医に相談してください。

副作用

頭痛、嘔気、食欲不振、下痢、めまい、発汗、ほてりなどが報告されています。



便秘薬

妊娠中は女性ホルモンにより腸が動きにくくなるのと大きくなった子宮で腸が圧迫されるため、便秘になりやすくなります。順調な排便は張りの改善にもつながります。

★マグミット錠・酸化マグネシウム錠



効能・効果

腸内に水分を引き寄せるため、便が軟らかくなり、膨らんで排便を促します。
小腸からほとんど吸収されません。妊娠中に一番よく使用します。

副作用

下痢があります。吐き気や嘔吐、口渇などを感じたら主治医に相談してください。

★ピコスルファートナトリウム内用液



効能・効果

大腸を動かすことと大腸での水分の吸収を抑えることにより排便を促します。

副作用

下痢、腹痛、吐き気、嘔吐、腹部膨満感、蕁麻疹、発疹などがあります。

★センノシド錠



効能・効果

大腸を動かすことにより排便を促します。

副作用

下痢、腹痛、吐き気、嘔吐、発疹などがあります。

注意事項

尿の色が濃い黄茶色または赤色に変わることがありますが、心配ありません。
腸を動かすため、子宮に刺激が伝わりお腹の張りを感じることがあります。



胃薬

お腹が大きくなってくると胃が圧迫され、不快感を感じることがあります。つわり時の胃のむかつき、他の薬での胃の不快感を予防するために使用されることもあります。

★レバミピド錠



効能・効果

胃の血流をよくすることにより、胃粘膜を増やし胃酸から守ります。通常、急性胃炎・慢性胃炎などの治療に使われます。

★ファモチジンOD錠



効能・効果

胃粘膜にある胃酸を出す細胞に働きかけ、胃酸の分泌を抑えます。通常、胃・十二指腸潰瘍、胃炎、食道炎などの治療に使用します。

副作用

皮疹、顔面浮腫、便秘などが報告されています。立ちくらみ、冷感、喉の痛み、発熱、倦怠感、皮膚や白目の黄色の着色、褐色尿などに気付いたときは主治医に相談してください。

鉄剤

★クエン酸第一鉄Na錠・フェロミア錠

効能・効果

不足した鉄分を補給し、貧血を改善します。

副作用

胃の不快感・膨満感、便秘、発疹、吐き気、嘔吐、胸やけなどがあります。副作用である胃の不快感を軽減するために胃薬と一緒に処方されることがあります。

注意事項

内服中に便が黒くなることがありますが、一般的には薬に含まれる鉄の色なので心配ありません。ただし、消化管からの出血と間違えないために、腹痛を伴うことがあれば、主治医にご相談ください。



解熱鎮痛薬

妊娠中の発熱、頭痛、腰痛などに使用できます。

★カロナール錠・アセトアミノフェン錠



効能・効果

痛みに関与している物質が体内で作られるのを抑えることにより、痛みを和らげます。

また、体温を調節する中枢に直接働いて熱を下げます。

妊娠中の鎮痛・発熱のほとんどのに使用されます。

通常、頭痛、腰痛、歯痛などの鎮痛、小児科領域の解熱・鎮痛に使用します。

副作用

過敏症、嘔吐、食欲不振、めまい、冷汗などが報告されています。

息苦しさ、高熱や皮膚や粘膜での発疹・水泡、皮膚や白目の黄着色に気付いたときは主治医に相談してください。

★普段、成人に使用する解熱鎮痛薬（ロキソニン、ボルタレンなど）は、妊娠後期に使用すると胎児の動脈管を収縮させてしまうため使用できません。

妊娠中はできるだけ使用は避けます。（★動脈管については後に記載しています★）

★市販の風邪薬には解熱鎮痛作用のある成分以外に鼻水・くしゃみを抑えるための抗アレルギー薬やカフェインなども含まれているため、注意が必要です。

どうしても病院に行くことが難しいときには、**妊娠中であることを伝え**

①**主成分はアセトアミノフェン（幼児に使用可能薬）**②**カフェインを含まない商品**
を保険薬局の薬剤師、登録販売者と共に選ぶことをおすすめします。

★妊娠中に使用を避けた方がよい市販の解熱鎮痛薬★ ～抜粋～
・イブ・ロキソニン・バファリン・リングルアイビー・ナロンエース・ノーシン
・セデスなど



妊娠中にお薬を使うときは・・・

妊娠中、授乳中ともに言えることですが、お母さんの体の中に入る薬の量が少なければ少ないほど、赤ちゃんの体に入る薬の量は少なくなります。

そのため喉が痛い・目がかゆいなどの症状で外用薬で対応できる場合は、できるだけ外用薬を使用することをおすすめします。

・口から飲む（＝内服薬）



・症状が起きている部分にのみ使用する（＝外用薬）



同じ成分でも体に入る薬の量が少ない！

一度主治医や薬剤師に確認していただくと安心です。

外用薬具体例；塗り薬、貼り薬、点鼻薬、吸入薬、点耳薬、点眼薬など



★サプリメント

サプリメントは簡単に使用できるため過剰摂取に繋がりがやすいのが問題です。

栄養素は本来食事から摂るものであり、それでも不足する栄養素を補うものがサプリメントです。栄養素の中にはビタミンAなどたくさん摂ると催奇形性のリスクが高まるものもあります。最初からサプリメントに頼るのではなく、栄養のバランスを考えた食事をしたうえで足りない分を補うような補助的な使い方をしましょう。

妊娠中・授乳中専用のサプリメントもありますので、使用するときはそちらをおすすめします。

★葉酸

葉酸は水溶性ビタミンの一種で、神経管閉鎖障害のリスクを減らすことが分かっています。神経管閉鎖障害は妊娠1カ月以内に発生するため、妊娠が分かってから葉酸を内服するのでは遅く、妊娠の1カ月以上前から内服することが大切です。食品から摂れる葉酸に加えて、妊娠の1カ月以上前～

妊娠3カ月までの間は1日400 μ gの葉酸の内服が薦められています。



痛み止めの貼り薬について

痛み止めの湿布である「モーラステープ(当院採用:ケトプロフェンテープ)」が 妊娠後期に使用できなくなりました。これは妊娠後期の女性がモーラステープを何枚も同時に使用して、胎児の動脈管収縮が生じた例、母体の羊水減少が生じた例が数例報告されたことが理由です。

以前からこの種類の痛み止めの内服(ロキソニン、ボルタレンなど)は「動脈管収縮」を起こすため妊娠後期の女性には禁忌でした。しかし湿布は「飲み薬ほどは胎児に影響しないだろう」と考えられ、禁忌にまではなっていませんでした。

実際、いずれも胎児死亡にまでは至っていないため、飲み薬と比べると湿布の安全性は高いのかもしれません。それでもやはり使わない方が無難だという判断がなされました。

妊娠後期はお腹が大きくなってくため、腰や膝に負担がかかりやすく、痛み止めの湿布や塗り薬を使いたくなる傾向にあります。外用薬は胎児への影響が少ないと言われていますが、大量に使用すると体に吸収される薬の量が増え、胎児に影響がでる場合もあります。どのお薬にも言えることですが、医師の指示を守って正しく使用しましょう。

★動脈管とは・・・

「動脈管」は、赤ちゃんがお腹の中にいる時にだけ開いている血管のことです。

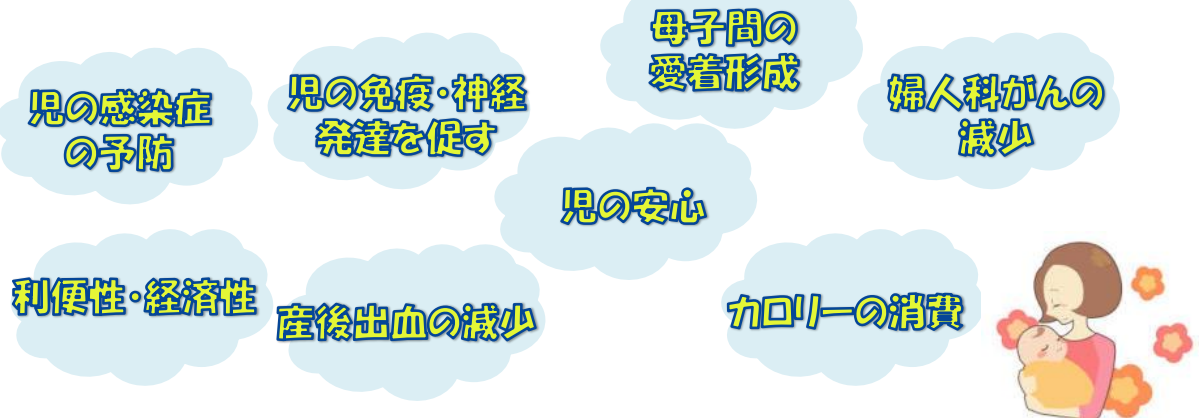
赤ちゃんはへその緒を通じてお母さんから酸素をもらっているため、お腹の中では肺で呼吸する必要がありません。そのため、肺に血液を送らないですむように開いているのが動脈管です。

そのため動脈管は、生まれて12時間くらいすると自然と閉じてしまいます。しかしこの動脈管が出生前に閉じてしまうと、赤ちゃんが酸素をうまく受け取れなくなってしまい、胎児死亡を起こすこともあります。

母乳育児について

母乳育児に良いことがたくさんあります。このため母乳育児を望まれるお母さんはたくさんいます。一方、薬を使用している場合は赤ちゃんへの影響が気になります。

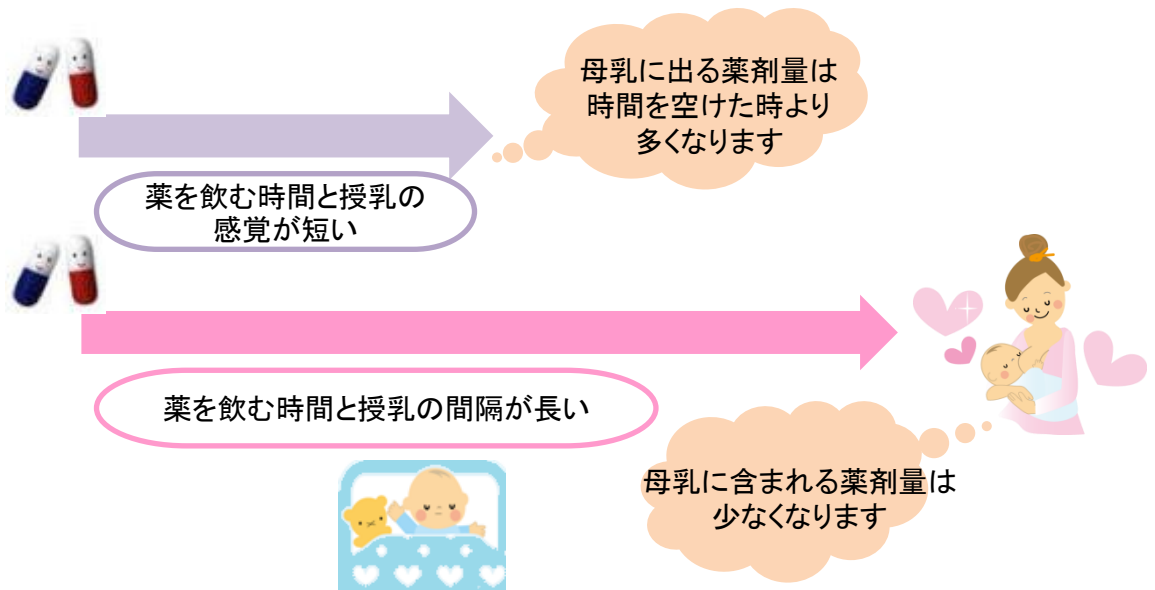
♪母乳育児のいいこと♪～具体例～



母乳にでる薬の量はお母さんが服用した量の約1%未満とされています。赤ちゃんは母乳を介してお薬をとることになりますが、悪影響を及ぼす薬は多くありません。

そのため薬を飲んでいてからといって、必ずしも授乳をあきらめる必要はなく、授乳をするために無理やり薬をやめる必要もありません。それぞれの薬について、主治医と相談しながら決めていくことが大切です。

授乳のタイミングも重要です。体内の薬の量が少なくなれば、母乳に出る薬の量も少なくなります。お母さんが薬を飲む前に授乳する、赤ちゃんが長時間寝る前に薬を飲むなどして、授乳と内服の間隔を広げると、お母さんの体の中から薬が無くなる時間をよりしっかりと取ることができます。

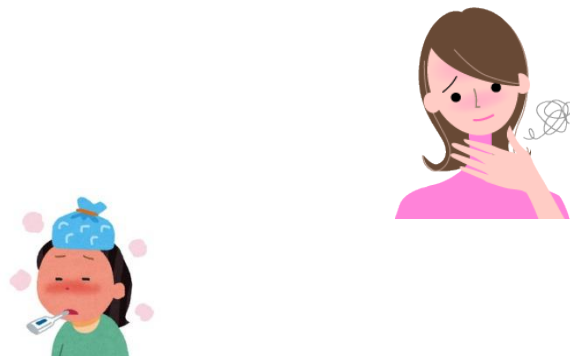


★風邪を引いたとき

病院で出される総合感冒薬では、実際に母乳中にでてくるお薬の成分は極わずかな量になり、赤ちゃんに与える影響はほとんどありません。

市販の風邪薬の中にはカフェイン配合のものもあります。成分を確認しましょう。

また風邪を引いても、お母さんが辛くなければ授乳をやめる必要はありません。喉が痛い、鼻水などの一部の症状のみの時は、のどスプレー、点鼻のような局所薬を使うことをおすすめします。



★熱が出たとき、痛みがあるとき

妊娠後期は普段大人が使用する解熱鎮痛薬(ロキソニン、ボルタレンなど)が赤ちゃんに影響を与えることがあります。(妊娠中の解熱鎮痛薬に詳しく記載しています)しかし、これらの薬は母乳中にはほとんど出ないことが分かっていますので、授乳中の内服に問題はありません。そのため妊娠中に使用できなかったイブ、ロキソニンS、バファリン、ノーシンなどの市販薬も使用できます。ただカフェイン配合のもの(イブAなど)もあるので、成分を確認しましょう。

★花粉症

花粉症の方は毎年辛い思いをされていると思います。花粉症の治療薬には、通常、抗ヒスタミン薬(鼻水やくしゃみを止める作用)や局所のステロイド剤(過剰に働く免疫を抑える作用と炎症を抑える作用)が使用されます。飲み薬の抗ヒスタミン薬は、お母さんだけでなく、赤ちゃんにも眠気を促すものがあります。

目が痒い、喉がイガイガするといった一部の症状のみであれば点眼・点鼻などの局所薬を使うことをおすすめします。



嗜好品について

★アルコール

アルコールは簡単に胎盤を通過してしまいます。メカニズムはよく分かってはいませんが、お母さんの血中アルコール濃度がそのまま赤ちゃんに影響を及ぼすと考えられています。

アルコールの赤ちゃんへの影響として、胎児性アルコール症候群（発育遅延、奇形、中枢神経障害など）、流産、死産などが報告されています。

絶対に安全なアルコールの量ははっきりしていないため、少しの量でも赤ちゃんに影響を与える可能性があります。

またアルコールは母乳中にも移行しやすく、母乳が出にくくなる、乳児のアルコール中毒、母乳の飲みが悪くなる・・・ということが報告されています。

妊娠中、授乳中は飲酒を避けましょう！

★カフェイン



アルコールと同様にカフェインも簡単に胎盤を通過したり母乳中に移行します。

一般にカフェインはコーヒー1杯に約40～100mg、紅茶1杯に約50mg含まれています。人での催奇形性は立証されておらず、1日300mg以下の摂取では発達遅延の可能性も少ないとの報告もあります。一般的な食習慣の範囲内であればまず問題ないでしょう。

授乳中も同じく一般的な摂取量なら問題ないですが、母乳中のカフェインの量が多いと赤ちゃんが興奮し神経過敏・寝つきが悪くなるとの報告があります。乳児は大人に比べてカフェインの代謝が遅く、代謝に3日かかるとも言われています。カフェインの過量摂取とタバコが加わるとSIDS（乳児突然死症候群）の可能性が非常に高くなり危険です。過度な摂取は避けましょう。



★カフェインが含まれるもの★ （抜粋）

- ・コーヒー・紅茶・チョコレート
- ・緑茶 ・コーラ
- ・ココア・栄養ドリンクなど



★カフェインが少ないもの★ （抜粋）

- ・麦茶 ・ほうじ茶 ・杜仲茶
- ・ルイボスティー
- ・ホワイトチョコレート

★たばこ

たばこの煙にはニコチン、一酸化炭素など約4000種類以上の化学物質が含まれています。一酸化炭素は低酸素状態を引き起こし、ニコチンは子宮の収縮を促します。その他にも妊娠中の喫煙で赤ちゃんがアレルギー体質になる、両親の喫煙でSIDS(乳児突然死症候群)のリスクが非喫煙時の5倍になるなどの報告もあります。

たばこと催奇形性の関連は完全には証明されていませんが、赤ちゃんの発育不全が起こるのは明らかです。



母乳に出るニコチンの量は濃縮され、お母さんの血中濃度の約2～3倍になると言われています。赤ちゃんへの影響を考えると授乳中は禁煙することが一番ですが、どうしてもたばこを止められないお母さんもいると思います。母乳には栄養が多く含まれているため、一概に喫煙したら授乳できないというわけではありません。主治医の先生に相談してみましょう。

赤ちゃんは自分の力でたばこから逃げることはできません。お母さんがたばこを吸わなくても周りの人が吸うことで間接的にたばこの煙を吸ってしまうため、お父さんや友達など周囲の人の理解と協力も大切です。

★今回紹介したのは、一般的に妊婦・授乳婦によく使用される薬の一部です。
紹介した薬以外の薬に対する疑問・質問・不安なことなどあれば、
いつでも医師・薬剤師にご相談ください★



最後に・・・

授乳中に必ずしも薬が必要でない場合もあります。例えば、軽い風邪や卒乳後でもできる治療などは、もう一度タイミングを考えてみていいでしょう。

効果が同じなら、授乳がより安全に行える薬を選んでもらえるように、主治医に相談してみましょう。

万が一、赤ちゃんにいつもと違うなと思う症状が出たら、主治医に相談してください。



★授乳と薬の相談について★

国立成育医療研究センターに設置されている「妊娠と薬情報センター」では、妊娠・授乳中の薬物治療に関して不安を持つ方のご相談に対応しています。また「妊娠と薬情報センター」ホームページに「安全に使用できると思われる薬」「授乳中の治療に適さないと判断される薬」の表が掲載されていますので参考にしてみてください。

「妊娠と薬情報センター」ホームページ「授乳中の薬について知りたい方へ」→「授乳と薬に関する情報」より詳細がご覧いただけます。

妊娠と薬情報センター

<http://www.ncchd.go.jp/kusuri/index.html>

妊娠と薬情報センター

妊娠と薬について知りたい方へ

授乳と薬について知りたい方へ

登録研究への協力をお願い

医療関係者向け情報

よくある質問・お問い合わせ

妊娠と薬情報センター

[English](#)

妊娠と薬情報センターは厚生労働省事業として、2005年10月に国立成育医療研究センター内に設置されました。妊娠中や妊娠を希望される女性で、妊娠・授乳中の薬物治療に関して不安を持つ方のご相談に対応しています。全国47都道府県の拠点病院に「妊娠と薬外来」を設置しており、各地域の相談外来で相談を受けていただくことができます。さらに、同意をいただいた相談者や登録調査への協力者を対象に、妊娠転帰や児の予後に関する調査を行い、それらの調査結果に基づいて妊娠中の薬剤使用に関する安全性のエビデンスを創出しています。



妊娠中の薬 について 知りたい方へ

妊娠中や妊娠希望の方、お薬の相談を行っています。相談のお申し込み方法についてはこちらをご覧ください。

授乳中の薬 について 知りたい方へ



授乳中のお薬の服用に関する考え方や安全性情報を紹介しています。授乳中のお薬相談も行っています。

